

# 伊勢神宮御神宝のご紹介



平成二十五年秋、伊勢神宮では第六十二回神宮式年遷宮が執り行われました。式年（一定の決められた期間の意味）遷宮とは、二十年に一度、御社殿、御装束神宝のすべてを新しく作り替え、大御神様に新宮にお遷りいただき、国内最大のお祭りです。

式年遷宮を行う意義は「皇太神宮儀式帳」に「常に甘筒年を限りて、一度新宮に遷し奉る」とあり、建築や御装束神宝等調製の高い技術を次代に伝え、私たちがいつでも変わらない御姿を望むことができる、正に「常若（とこわか）」の精神を顕現したものであります。

新宮に御（御神体）をお遷した後の御社殿は空殿となり、お取り壊しを行うこととなりますが、わが国には千年以上の歴史を持つ木造建築物が現存しており、建築学的にも御用材の耐久年数はまだまだ十分であるといえます。





## 戸隠神社



### 青垣

平成28年[秋冬号]

戸隠神社発行  
〒381-4101  
長野県長野市戸隠3506  
026-254-2001  
<http://togakushi-jinja.jp>

このことから、式年遷宮は、決してご社殿の老朽化によるものではなく、常若の顕現であることがご理解いただけることと存じます。

今回の御遷宮では、木曾の檜と合わせ、て宮域林（神宮林）の檜も約七百年ぶりに一部使用された由、御遷宮の将来に向け、御用材の調達について綿密な計画の下に行われていることと拝察しお慶び申し上げます。

旧御社殿は取り壊され姿、形を変えてまた新たな役割を果たします。例えば、御正宮（内宮御本殿）の両脇の棟持ち柱は五十鈴川にかかる宇治橋前の鳥居に姿を替え、二十年后には三重県亀山市の「関の追分」と桑名市の「七里の渡」に立つ伊勢国への入り口の鳥居としてさらに二十年間参拝者をお迎えします。

また、御社殿に用いられた古材は、内宮・外宮の摂社・末社の修繕・造り替えの御用材となるほか、全国の神社に「撤下古材」として無償で提供されております。

皆さまも知らず知らずのうちに神宮と御縁のある神社にお参りされているかもしれませぬ。

御遷宮の際に御装束、御神宝も全て作り替えとなり、旧宮の御神宝等は全国の神社に「撤下」されます。撤下に当たっては、神宮の御祭神と特別の縁故のある御祭神を奉斎する神社で、御神宝の展示施設が備わっていることなどが条件となります。

戸隠神社は天手力雄命はじめ天の岩戸開きに功労のあった神々をお祀りするご縁で、この度の撤下に当たり申請を致しましたところ、「皇大神宮御神宝 梓御弓 壹張」〈図1〉「皇大神宮別宮 風日祈宮御神宝 銅黒造御太刀 壹柄」〈図

これら御神宝は本年十月より、当神社宝物館（中社）にて展示させていただきます。

多くの皆さまがご拝観になり神宮に思いを馳せていただくことはもとより、古より伝わる日本の伝統技術の粋をじかにご覧頂く好機となりますようお待ち申し上げます。

戸隠神社  
宮司 水野邦樹

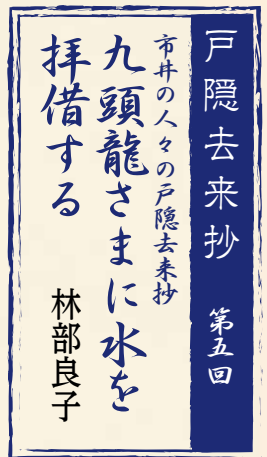


2）「皇大神宮別宮風日祈宮御神宝 壹枚」〈図3〉「豊受大神宮別宮風宮御神宝 御胡篋 壹合」〈図4〉の四本の御神宝が下附されました。

「皇太神宮儀式帳」によれば、御正殿に「天照坐皇太神」の同殿坐神二柱として「左方」に「天手力男神」が奉斎され、その象徴として「御形弓に坐す」と記されており、御本社である奥社に「天手力雄命」をお祀りする当神社にとりまして、「梓御弓」をご下付賜りましたことは、真に有り難く意義深いことと存じます。

図3 後列左

※あまがき（青垣）とは切り立った険しい山が垣根のように連なる様子。当社では祝詞の中で「青垣成す戸隠山の麓に鎮まり坐す戸隠神社」と用います。



戸隠の地主の神で、すべての命の源である水を司る九頭龍大神は、雨乞いの神、五穀豊熟の神、虫歯の神、縁結びの神として信仰を集めてきました。今回は、九頭龍大神に係る信仰に注目します。



図1 水桶（戸隠神社蔵）

越後国三島郡上桐村・門新村・黒坂村（旧新潟県和島村。合併により現在、新潟県長岡市）が共同で戸隠の御神水を拝借した記録をご紹介します。

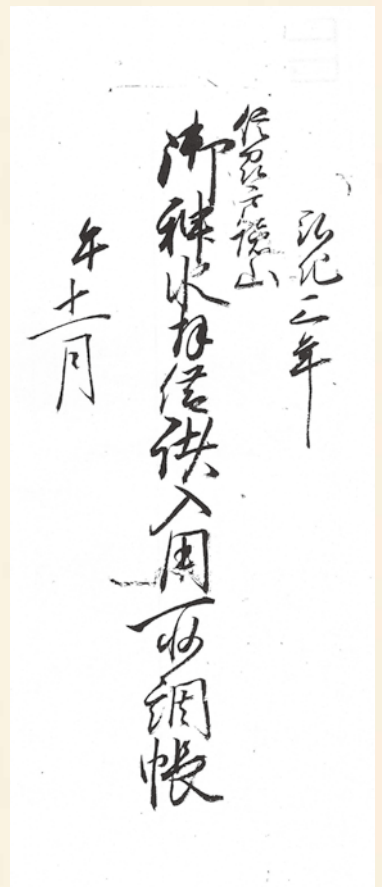


図2 「信州戸隠山 御神水拝借諸入用取調帳」(個人蔵)

上桐村には川がなく、上桐村に三ヶ所、黒坂村に一ヶ所ある溜池に頼る他なく、用水に苦勞しました。更に保水力のある山もなく、日照りが続くと干損に悩まされ、この三村では例年のように戸隠山まで御神水を拝借に出掛けていました。

弘化三年（一八四六）七月七日、代表として久蔵と伝兵衛を戸隠へ遣わしました。図2の「信州戸隠山 御神水拝借諸入用取調帳」によれば、先ず「御神水御樽壹ツ拵料」として御神水を入れる樽一つを新調しています。（参考資料：図1）代金は、錢七十文（現在の約八百四十円）。

二人は、九頭龍大神を祀る奥院（現在の奥社）の「観法院様」（現在、宿坊神原）に一泊。戸隠山の御神水を拝借するにあたり、次のものを差し上げました。（図3）

- 一 金壹分 御神水拝借御礼
- 一 同三分 御祈禱料
- 一 同壹分 御供米料
- 一 同壹分 志

金一分は現在の約二万円弱です。村を出発してから四日後、「御神水七月十一日御着」、御神水が村に到着しました。

御神水は、この地域の明神様である桐原石部神社に「御逗留」。蝋燭が灯され、お酒やお菓子が供えられ、前年から大切に保存したものでしょうか「新白米」が御膳に捧げられました。奥院で御祈禱を受けた霊水が、九頭

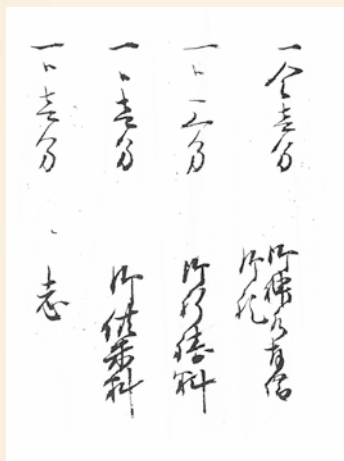


図3 「信州戸隠山 御神水拝借諸入用取調帳」部分

龍さまと同体となったのです。桐原石部神社に詰めていた村人たちは、振舞われた酒を戴きつつ降雨を祈ったことでしょう。

雨乞い祈願の風習としては、戸隠山と黒姫山の中間にある種池の水を持ち帰り田畑や池に注ぐものがよく知られていますが、この地域では御神水を撒くという記録は見られません。特筆すべきは、水を拝借したのですから、それをお返ししたことです。同じ年の十一月に、御神水は戸隠へ返上されました。

使者は、拝借の際の伝兵衛のほかに茂右衛門です。やはり観法院に一泊し、拝借時と合計した御賄料、金二分（現在のおよそ四万円）が支払われました。

御神水の拝借と返上にかかった費用の総額は二両二朱あまり（現在の約十六万〜二十万円に相当）。御神水を入れる樽の代金、御神水拝借御礼・御祈禱料・御供米料・志、御神



はやしべりょうこ氏  
プロフィール

1979年、新潟県出身。新潟大学大学院人文科学研究科修士課程修了。長岡市で古文書の仕事に従事。戸隠に魅了され移住。江戸期と戸隠の発掘をライフワークとしている。北野美術館戸隠館勤務。

【参考文献】  
和島村史編さん室 『新潟県三島郡和島村 村落史資料集③ 上桐三ヶ村』  
和島村 『和島村史』資料編Ⅲ 近現代 民俗

こうした戸隠山への信仰や旅などの記録は、まだまだ各地に眠っていることでしょう。市井の人々の記録を掘り起こし、光を当てていけたらと思います。

この年はご祈禱のご利益が早かったのか、六月十八日、お返しする御神水が戸隠へ向けて出発しています。この年にかかった雨乞いの費用は百十八円八十四銭、現在の約三十五万円に相当します。江戸時代以来、雨乞いの費用を賄い続けた村人の信仰心に胸が打たれます。

大正十一年六月十日、代表者二人が遣わされたことが記録されています。さすがにこの時代になると柏原駅（長野県信濃町）までは汽車を利用した、とのこと。

「大正拾壹年度雨費簿」と「雨乞雑誌」に、大正十一年六月十日、代表者二人が遣わされたことが記録されています。さすがにこの時代になると柏原駅（長野県信濃町）までは汽車を利用した、とのこと。

水へのお供え物などの他に、使者の往復の旅費や小遣いなども含まれます。

時代が下っても、戸隠への雨乞いは続きました。明治期には連年のご神水の拝借に加え「竜が雲を呼ぶ」というので、木で作った「竜の頭」にわらで編んだ胴体をつけ、椿の葉をコケラに見立てて突き刺し、それを頭上に掲げて、田圃の回りを回った」という古老の話も残されていて、九頭龍さまへの信仰が見て取れます。